

寶鏡三昧薰蕕談

東京圖書館

一	五	二	七		
冊	号	架	函	屬	類

M

019464-002-5

7-56

参同契薰蕕談

恒川/述

下

M19.2

ABG-0186

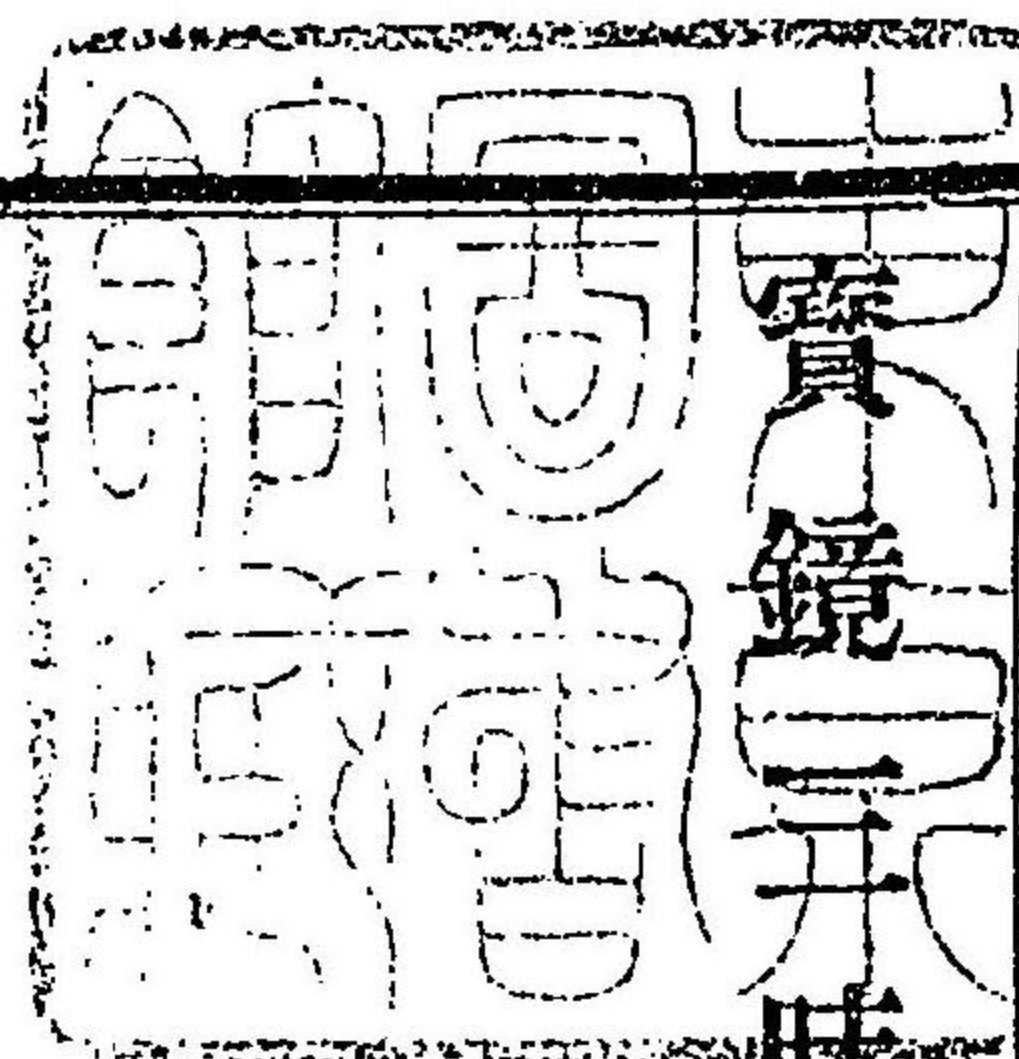


大乘月舟天目恒川和尚講錄
西有穆山和尚訓點

寶鏡三昧薰蕕談

林古芳刪補校訂

明治十九年七月二十六日内務省發行



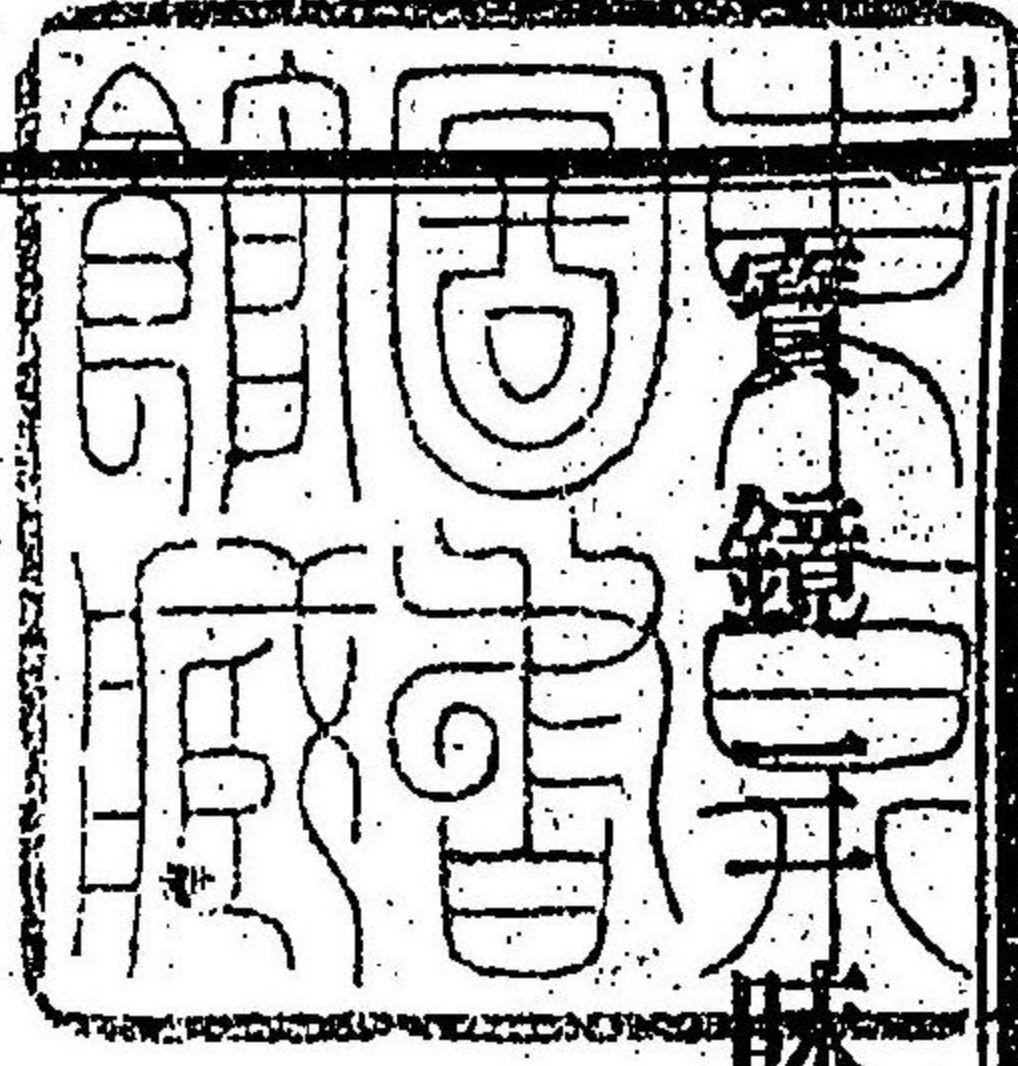
寶鏡三昧 薰蕕談

大乘月舟和尚 講錄
天目恒川和尚
西有穆山和尚 訓點
林古芳刪補校訂

寶鏡三昧

○恒川和尚の辨にこれ篇の述者未だ詳ならず其異説既に古徳之きを尽せり弟靜に考ふるに實に洞山大師の所述なり。始終の意味過水の偈に根據して暗に五位の眞訣を含めり寶ハ稱美の言なり明鏡と言ふ如き明鏡に臨むときハ形の娟媿を移して味まじすこの書に臨むときは意

明治十九年三月二十六日内務省贈付



寶鏡三昧 薰菴談

大乘月舟和尚 講錄
天目恒川和尚
西有穆山和尚 訓點
林古芳 刪補校訂

寶鏡三昧

○恒川和尚の辨にこれ篇の述者未だ詳なると其異説既に古徳之を盡せり弟靜に考ふるに實に洞山大師の所述なり。始終の意味過水の偈に根據を暗に五位の眞訣を舍り寶ハ稱美の言なり明鏡と言ふ如き明鏡に臨むときハ形の娟媼を移して味まきすこの書に臨むときは意

此美醜を照しく明かり是故に況へて以て題目とさす
三昧の名義は凡そ心相を應じて妙處を得るの謂よて之
を三昧と云ふなり

○月舟和尚は辨よこれ書は室中の密授よして流布よ屬せ
ず宋朝以來おれを世間に公行す全く洞山大師の作と云
ひ雲岩和尚の作よて洞山大師之に傳ふるありやも云へ
り又は雲岩和尚が藥山禪師より傳ふると唱へて作者詳
かならず書中多く洞山大師過水悟道の偈意多く當よ洞
山大師乃作述あるへし況や文章乃妙に至ては洞山大師
は非よすんは誰る是れよ及はんや知るへし室中潛に曹
山和尚よ口授し玉ふ形影は法門は過水悟道は頗よ本け
り凡う影と以て不生の生に諭し不思議は境界を譬ふ般

若れ六喻十喻も不思議の譬をまを一切有爲法の偈容易
に看過すへかす三昧は義廣く經論よ出す中に就て大
般若よ若干れ文字を列ね智論に其境界を辨折をまを微
細の分別なればよやすく測り難し中にも三昧は一三昧
よ一切れ三昧を統攝すや云へり知ぬ寶鏡三昧は王三昧
の三昧あること也

○編者曰く洞山大師過水偈に曰く切忌從他覓。迢々與我
疎。我今獨自往。處處得逢渠。渠今正是我。我今不是渠。應須恁
麼會。方得契。如々と有り況や本章は寶鏡に臨むか如し形
影相觀る汝是れ渠に非よ渠正に是れ汝と云へる至りて
は一層洞山大師の作述あるを保證するに足る古今述者
れ名を題首に擧げざるは密傳の秘本よあまはなり今書

名のちを以て述者乃彼此を論るは活眼も乏しければなぞ深く參得しは是非を論するもなれ實にされ洞山大師の眞作は相違あるましくと參しまいらるるを○般若六と十喩は幼。焰。水月。虚空。響。軌城。夢。影。鏡像。化。あり本文の寶鏡は第九に鏡像ありと云ふの儀なり六喩は十喩に攝しあるを略して誌さす○般若智論云云を般若に三昧を釋して如何んの一三昧と云ふや佛言く法界一相として法界は繋縁をこれを一行三昧と名く○智論には一切の禪定心は攝するを皆三昧と名く秦には正心行處云へるの類は略説しあるをこれからん

如是之法。佛祖密附。汝今得之。宜能保護。○恒川和上の辨は法を無法なり心も無相かを争ふ名貌する

こと得んや唯に如是と言ふのみ如有無如迷如悟一切如如にして全く染汚あることなし是れ諸佛の眞宗なり群生の本源なり佛祖是れ如く傳へ是の如く付く間に風を通せず之を蜜付と云ふ汝今といは如是の法に通契する底を指さかり切に須く保護すへし作麼生も保護請ふ左右と看よ

○編者曰く如とは一切不異不變の義にして是は物々非を脱する諸法の相と云ふなり古註に如は真空なり是を妙有なりと今この如是の法を吾等日用に履る愚の如く魯れ如く即せず離せず保護すれば汝として之を得

るものは一人もなす之れは佛祖の蜜付とを思ひつるなり。蜜は却て汝も邊にあるとて句を深く思ひ遣れ古芳なり。有るたぐ頂戴するなり。

銀盃盛雪。明月藏鷲。類而不齊。混則知處。○恒川和

尙の辨にまの四句は如是の法と保護とを提綱なり之より下は此旨を弄して如是の法保護の宗旨を示し玉ふなり。如是の心は万境に類して齊しむらす銀盃に雪を盛る。如く万物が混して類せし明月鷲を藏す。如く回互して不回は不回互にして回互全く隔碍なく染汚なし此の宗旨を薦得べきは永く兩脚を伸へて安眠すへし處とは分知の義なり。

○月舟和上の辨に能く一切の法に一色し一切の事に一色

して銀盃と雪と異色なり。如く明月に鷲は隱れ同一色なり。如く類して纒をも隔てなく混して纒をも透間なきを大功一色の修行と名く般若蜜多一味なるが故に法をも又一味なり能く一切の法に類して而も一切の法も齊しむらす能く一切の法も混して而も墮せざる處を知て同ふせざるが異類の修行と名く一切の法は即ち一切の法もあらはれ一切の法も名く都て一切の法も顯を若くは相を顯はれしむるが偏位なり法と相に隨せざるは正位なり故に偏位は色界なり正位は空界なり。

意不在言。來機亦赴。○恒川和上の辨に凡そ佛祖の宗旨を必ず言句文字にあらす來機あるときは言外に機を通じて趣るべきはかへ故に擊竹の旨を得て蛙鳴の宗と

會ハ況や文字言句に於てや只銀盃に雪と盛り明月に鷺
を藏ハ其境にありて其境に隨せざるべきは來機自然に
宗を得て如是法界も趣向せしと云ふよとみし

○月舟和上乃辨に意を元より言語にありからし且く言語
を假りて意を通はるる故に一言半句を以て來機を辨し
來機も趣くかり依て言前に聽取し句外に承當するあり
○編者曰く佛祖は無舌人のことなきを殊更に言語を弄は
るる好まざるを法の檀度なせばころ四來此物機に應
して拂拳捧喝の方便ありつるなり左れば學人は直に機
先の眼を開れ動と差に隨せし直下に大火聚なる加是法
を識得はるこそ學道の所詮なき錯て漏器の罪人となる
おとなるべき

動成窠臼。差落顧佇。

○恒川和上の辨に上を承て如是

法の應機を辨するあり佛佛祖祖の應機接物を水月の相
應はるる如し思慮と動せし彼此を觸觸如如にして
全く染汚みし然きは師家は來機を見しして動はるは觸
處に窠臼を師學ともに差互えて顧念佇思の妄識に
陷墮して如是法の宗旨に違却す嗚呼今時師學みか自己
を知らず他已を知らざりて曾師に曾弟を導きて群曾岐
路に墜つ豈に漸愧せざらんや

○月舟和上の辨に來機を辨し來機も趣くや雖も一毫も
動はるは意識情慮の窠臼なれば微塵を差へば顧佇聘
望乃分別に落つるあり都て意乃萌し識乃萌し動と云
ふあり故に動着するおやなかれと誠むるあり

○編者曰く窠白[○]やば鳥の樹にある巢を窠と云ひ鷄か羽虫
ややりたり兒に乳[○]與へたりとる四所を白と云ふ○顧
件とは行ふんとして止まり去らんやして住むる思慮の
定まらざるの意あり共に染汚の謂あり宜く岩頭和上の
ノるは根塵[○]脱せむとされは生死に沈むの金言に參
まぬへし

背觸[○]其非[○]如[○]大火聚[○] ○恒川和上の辨に如是の心は大

火聚乃如し動て來機に觸るときは面門[○]燒却す來機に
退却せると死は火徳[○]遺失を觸せむ背せむ如何なる不
犯[○]通せんや木人夜半に靴と穿ち去る去石女天曉に帽
を被て歸る

○月舟和上の辨に絶待の大法に一切の相[○]離きて背觸に

涉らむ譬へは大火聚の四面に現然して淨[○]裸[○]赤[○]洒[○]々[○]れ
面目露堂堂に忘て盡天地に獨尊不二なり火ハ南に位し
離の卦なり三昧も大火聚に謂あり

但形[○]文[○]彩[○]即[○]屬[○]染[○]汚[○] ○恒川和上の辨に上は背觸の句

然承て不染汚の宗旨[○]弄むるを但ハ徒かり猶ほ卒爾
や云ふか如し如是の法を卒爾[○]よむ文言摸彩に形ばせは
即ち染汚に屬するなり不識と云も揚眉[○]やかむと是れ染
汚なる畢竟[○]おき個の物に非[○]一切の限量と對待を超過
するなる其の當[○]躰[○]即ち是なり恁[○]麼[○]に承當するも是を染
汚なり作[○]麼[○]生[○]る消息[○]通せんや請ふ下文を見よ

○月舟和上の辨に一切辨白なれば境界に纒[○]を知見解會[○]此文
彩と形せは即ち染汚とあるなり説似一物即不中なり唯

嫌棟擇なり只たこの不染汚は諸佛の護念する所なり
○編者曰く説似の句を南岳懷讓禪師が曹溪大師に参した
るとは什麼物恁麼來の接手と措くをくこやかく八年修
行志後に答へある句語に於て曹溪大師は諸佛代所護念
なり汝も我を西天祖師と如是と證明をされたる公案
の取意をさるる○唯嫌の句ハ鑑智大師の至道の全躰は直
指さきたる語なり

夜半正明。天曉不露。○恒川和上の辨にこの二句は上
の不染汚れ旨は辨したるなり夜半正明とハ暗にして暗
ならず天曉不露とハ明にして明ならず背觸に涉らず文
彩に屬せず彼は離れ此と離れ洒々落落なり是こ乃没量
底諸佛の護念する所なり之に依て徧正回互の法則と立

る者なり子細に見よ

○月舟和上の辨に夜半正明則ち明暗は離れて明あるは非
す天曉不露則ち暗明を離れて暗あるは非す夜半なれに
非す天曉なきに非す絶待の一法は契當なきハ暗は暗れ
當躰則ち絶待あり明は明の當躰則ち絶待あり絶待の中
に自ら明暗相對して前後の歩の如く先行到らば末後太
た過く其迅速なる電光も追む難し我の承陽大師ハ天下
後世の規範とて一言半句を文章に顯し説けり故に擇法
眼次具せざる者は遠路なりと評して曹洞閃電は機要は
知らば誠に愚の至極ある者なり

○編者曰くこ乃二句は回互圓轉の機軸とて來機に應用
するの根源なきを須く着眼して虚參せまらばよく頼

みよまいらるるあり

爲物作則用拔諸苦雖非有爲不是無語 ○恒川和

上の辨に於れ段は有爲に無爲と兼ね無語は有語と兼ね
回互圓轉して不染汚の宗旨を弄ひ甚妙なるへん凡そ
一切衆生れは免法則となりて染汚は諸苦を抜く是れ權
化門なり假し説むて全く定法なると有爲に非すとすれと
無語は是とひるゝわらす左轉右旋とも脱着して自由
り是れ應機接物の活作畧り或時は鷲峯縮と説れ鳥を
素となす是は有語中の無語なり無語中の有語にして全
く染汚なし總て有無は是非と偏正に屈曲すは如是の
法に違背す争ひ物にめは法則となり染汚の諸苦を抜く
よとを得んや尙や次の如鏡と如相と如離と如莖と如杵

の五如喩を用ひて不染汚の消息と弄し以て如是法の應
變を會通する左の如し

○月舟和上の辨に能くおれ宗に達すきは萬物の規則とな
りて拔苦と樂むあり絶待の一法元より一切相を離れて
有爲にあらざるを全く無爲に沈まひ機に臨み口は開れ
言語なきにたす二乗聲聞の無爲の深坑に陥りて利他
の悲願を失するの類に似たりからざるあり

○編者曰く釋迦如來の四弘誓願を彌陀佛れ五百大願を洞
山大師の三路五位を臨濟和上の四賓主を物に應するの
方便に於て自の手元には有無の影像を故に涅槃經に
も如來は一切衆生れにめは諸法を演説はると實に所説
なると之を有爲にあらざるは諸法を演説はると實に所説

凡ハ舌大千次覆ふと言語三昧に入る故は無語にもあらざるあり管よ四生六道を能化するるとめよ諸相と言語と假に現はるなり恰も千江に一千の月次現するか如きものあり故に下に嬰兒は五相を以て化物の相を明るせり

如臨寶鏡形影相觀汝是非渠渠正是汝○恒川和

上の辨よあの段は前凡の有爲無語を轉えて汝渠とあは心境一如にあて染汚なき乃旨と辨よ玉ふあを形ハ影の本躰あり影え形の分体あり彼此即一にして俱に其實体あることあし汝は鏡前の形相と指よ以て心体を比況するあを渠は鏡中の影と指よ以て境体に比況するなり心は境に隨て現し境え心に依て成す彼此俱に空華底の

現成よあて實體あることあし汝は有躰にして無躰の渠に同くあはざるに似れやも其汝を推すときは汝亦實體の形影あることあし汝渠も虚假不實の物体にあて二かく又一なあ若あ有無の二見に渉るやきは外道の邪見なり全く佛道の正見よはあらあ若あ此の宗旨次會せもれば物のさ然に則とあり染汚の諸苦を抜くあとを得んや染汚やハ二見に執滞するれ妄想を指なり寶鏡やえ形影或弄る處に依るのあ必ず寶字よ滞て祖意を失るあとかるれ月水中にあり形影を弄するに何と異あらん静るに如字を視るに當に鏡よ主意なきことを知るへあ悉るよ祖意よ參せよ形ハ眼耳鼻舌身ハ五根なり影とハ色聲舌味觸の五塵なり是故に五相五變五味五股乃五數

汝弄と根塵一如に志て心境無二此况汝作り不深汚此
宗旨を會通するなり尙や參同契の所謂火熱風動よそ尊
卑其語汝用ゆるまて此宗旨を熟味して弟の所辨汝知る
へ洞山大師過水偈は切は思む他に從て覓むるこや汝
迢迢やして我と疎かり我今獨り自ら往く處々に渠は逢
ふおとを得よ渠今正是れ我我今渠に遇ふは應に須く
恁麼に會えて方に如如は契ふことを得へ左は苦口
に此の語脈を探てこれ章旨を會すへ水鏡や寶鏡や胡
る差異あらんや又汝渠は二字ハ異字同訓なり切は須く
好看すへ

○月舟和上は辨は絶待の一法を人人具足し個個圓成すや
雖も寶鏡に臨むことみくんを承當はへあらは受用する

こや能をきるかり寶鏡に臨むや佛知見の開發する乃
時節なき有情非情同時成道の時節あり此時まきく本
形汝知るは故は鏡中此影は本形は影よして分別はを
他みよ承當はなり過水悟道の偈は洞山大師自證の
法門あるは故は我是れ渠は非はを説きぬ今は曹山大師
は對はるは故に汝是を渠に非はは云へり本形と指し
て汝よ影象を呼て渠とせり寶鏡に臨て形影と照して
看よ汝曹山の本形を彼の鏡中の影にあらす彼は鏡中全
く他物にあらす汝は曹山大師は本形は影かりし哀しむ
るを曾て寶鏡に臨まざる時は影を認め頭に迷むる演
若れ如く狂走はる汝免をす斯の如き輩は胡る釋種と稱
すへまや凡そ形は正位に影は偏位に喩るなり一説は鏡

き正位は影を偏位とひるは洵に誤なり
○編者曰く演若は室羅婆城中に居て晨朝は鏡を以て面を
照らし鏡中れ頭に眉毛見ゆるを愛せぬ一日已か面目
見へざるを瞋責して魍魎とみす状を亂し狂走ひるれ意
あるを委くを楞嚴經に四は出るなき○こき有爲無語
にあらざるの意と辨えて彼此れ對待なきの寶鏡は示せ
り恁麼の寶鏡は他物よりあらざるは自己の脚下を顧り見
るへし何を汝か何を渠か決し一合相は得ざる
なり

如世嬰兒五相完具。不去不來。不起不住。婆婆和和。
有句無句。終不得物語。未正故。○恒川和上の辨に今又

嬰兒の五相。淺以て有爲無語は句。淺會通す併せて物の
めに則てなる乃宗旨は辨し玉ぬなり初生の嬰兒に五相
を具すると雖も各各未だ其便を得ず有相便ち無位なり
無相にして全く潔汚なし是を如是の法相にして如來乃
心行なり則となり苦を抜くの左右なき涅槃經に曰く嬰
兒は能く大字と説く如來亦然り大字を説きぬ所謂婆婆
和和は無爲なり之を嬰兒行と名くこ乃語を讀みく弟か
所辨は知るへ一言ゆる有爲は弄するとも有爲に潔汚せ
ず無爲を説くとも無爲は固執せぬ全く舌頭に筋骨なし
語末の正法からざる故に覺範以來の所辨を故かくして
五位と弄するは此三昧を用ゆる所以と辨せきりしは
何れ謂うや

○月舟和上の辨に嬰兒行は委く涅槃經に出る嬰兒行を即ち如來行なり嬰兒の五相を具するを以て一法に五位を備ふるは喩ふ五相ハ去來起住語なり

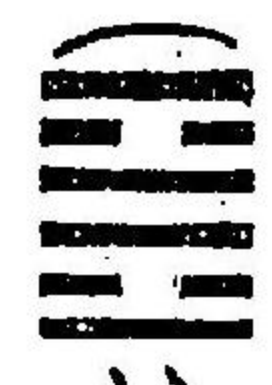




○編者曰く涅槃經ハ第二十一卷の嬰兒行品を指し本經乃不能語。洞山大師ハ婆。婆。和。有。句。無。句。に變換されしハ一層ハ深意を含めを往て指月老人乃解を見るへま。此五相ハ佛祖れみからを寶鏡全眞の作用かれは人。之。し。具。せ。さ。る。は。み。ま。左。ま。と。嬰。兒。乃。如。く。な。ら。き。る。故。よ。二。六。時中狂走するは免れざるなり




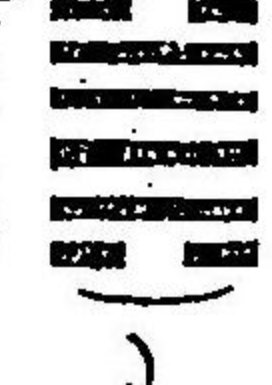

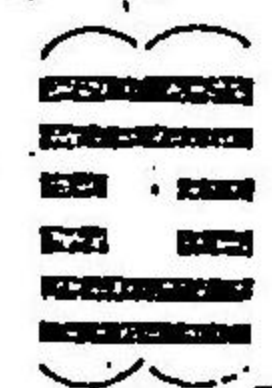

重離六爻。偏正回互。疊而成三。變盡爲五。○恒川和

上の辨に今世流布此書には如字。ハ用むす重字。と采るは不可なり六爻ハ語ある則是重字は衍となし笠上の笠を

り眼と開れく之を看よ中古已來如字と用ひす故に突出故にあ五位と説け此篇を用む所以ハ辨せざるは怪むる親く如字ハ意旨ハ熟味く比況の語なるは知るゑ然らざるときは甚し明難しおれ唯五變一離ハ弄して五相一身の旨ハ會通するのみ疊變の説古徳これ盡せり舉しく佛説に和融するのみ疊變の説古徳これ盡せり煩く之を論せず必は枝葉を弄し本旨を失するおなるれ

○月舟和上の辨は永覺古徹の解は宜しからしと故に五位顯訣に因て徳翁良高和上は五位の畧註を作るなり今考ふるに疊て三となすは茲に多議あり曰く六爻ハ疊て三となすの儀有り又下り疊て巽となす上り疊て兌となる

離乃六爻なり  は巽なり  は兌なり  此三卦をみる
 之れ三とあるの儀を巽兌を上下とるときを澤風大
 過  風澤中  乃二卦となる之れ三疊五變あり而
 して離の本卦に歸る後ち卦爻の之く所なく是を變盡て
 五とあると云ふなり茲み用ゆるは離乃一卦れ八卦は
 本三爻あるを伏儀氏重て六爻となく故に重離となす離
 方あり南の在所を火裏にて虚なり又物に麗れ明
 るなり炭薪の物類を合するに依て明あり故に如離六
 爻は沙門金剛の眼睛あり一雙の眉毛あり徧正回互都て
 機を臨て變に應ひ決して按排借らひ自ら回互途
 と家舎を來往すれや終に中虚回互の離体に負るは五位
 自然に具する重離の言を借て比にて氣息流通を乃み

豈易道に理論に渡るもれならんや須を宗旨失す
 ことなるを
 ○編者曰く恒川和上は如字を前代未發れ説なり離の卦は
 の三爻なり之を重ぬる故に六爻なる左れば重字
 を死せり況や前を寶鏡に臨むか如く又は世に嬰兒れ如
 くとあり後に莖草の味れ如く金剛の杵の如くとありて
 前後の文章を相應して見きは如字は欠くへかざる處
 なり故に古芳は如字を至極穩當の説と覺悟せり 
 離れ卦兼中到に  兌の卦徧中正に  して澤風
 大過  正中來に  巽の卦を正中徧に  風澤中浮を徧
 中至に配當して解釋しを夫は易理を粘着して却て
 宗意の淡泊なるやに似たり

如莖草味。如金剛杵。

○恒川和上此辨云莖草の一根は五味を分ち金剛杵は一体よしと五股あり是又形影一体なるのみ五相一身に志く五變一離なり同等不二に志く五如即ち一なり全く染汚おれの比況なるかと明白あり如上五如の喩説を切に須く好看すへし祖師巧み五如の會し五根五塵が融し玉へり一如一相一相は無相あるの宗旨を説きさり然るも中古重字に作るは犯罪彌天なり○月舟和尚此辨は莖草を五味子なり一草に五味が具へたり金剛とし五股なりと乃二喩も一位に五位を具ふるかと明らかり瑜珈には獨股あり之を獨一法身が表は五股は五智が表とこれら法喩乃二に符合せし

正中妙挾。鼓唱雙舉。通宗通途。挾帶挾路。○恒川和

上乃辨に上に鏡。見離莖杵の五物を擧て如字を弄し不染汚れ宗旨を辨と所謂如や其物身に偏倚せざるの義あり今あの段ハ偏あらを倚ならを過不及なきの正當が指して正中と云ふあの正中ハ方法が包含して偏頗に墮せし故に妙挾と云ふかり唯あの正中を佛乃護念はる所なり鼓唱乃鼓は行棒打拂なり豎説横談は唱あり然るも鼓唱各別に行はるにわす故に雙擧や云へり雙擧は偏倚せざるの謂かり之が正中や云なを便ち妙説中に則と取らざるハ有語中の無語に志く全く挾ふの義かり行棒を言外に機を通はる故に無語中の有語なを全く染汚はるゝあらは然れば言説と棒拂を何る異をあらんや之を鼓唱雙擧と云ふ次乃二句を上の二句と會通するあり通

宗通途。も宗乗化途各別に行むるは宗に通すると
きハ路は挾帶するなり洞山大師敲唱俱行の偈を以て知
るへし偈曰く金針雙鎖備。挾路隱全該。雙鎖備るとは譬
は一針と黑白二線を挾鎖するの義なり挾路ハ線脚乃
通する處あり黑白線形は挾路に隱顯して分曉せざると
二線該通して差互あるまとなし之を隱よして隱ならず
回互に志て不回互なり不回互にして回互なり宗說兼備
して偏頗に墮せず洵に顯然なるものなり

○月舟和上ハ辨に絶待代中に法爾と志て偏正二法を挾帶
志左輔右弼とかりて挾帶敲唱雙擧るなり一にあらは
異にあらは伊字三點れ如くかれはこそ妙挾と云ぬ又靈
源ハ本宗に通し枝派の諸途に達し偏正の二路茂兼帶し

唯一代中道と挾むかり芥子れ小なるも須彌の大なるも
此の二と帶せしや云ふやなし能々挾ふて中的に犯さ
るを奉重や云ふを文殊迦葉れ如來に左右侍するに同志
○編者曰く金針代句を洞山大師綱要頌乃三首れ初は
敲唱俱行れ偈なり恒川和上を上乃二句れ多を擧ぐ其下
の二句は曰く寶印當空妙。重々金縫開とありぬ○妙挾れ
道理を丁々鐘と妙挾とて同一時なるとき音韻を發はる
か如き夾して一方に偏せざるなり之を以て鼓山和上は
正位中に本や一物をし實よ一切代事相に妙挾を故に正
偏双擧して偏頗は落はと云へり宜へなるるか
錯然則吉不可犯忤 ○恒川和上ハ辨にこれ段は上の
挾帶挾路宗說交錯するを偏頗は墮せざるを辨はるかを

偏正回互挾帶挾路錯然として一物に犯忤せざるや吉なり然らざるるときは宗旨を失はるるなり犯忤ハ背觸れ義なり背觸に渡らざるるときは錯然として吉なり上の一句は離卦なり初九爻の辭あり自然に文言を借るれ
○編者曰く交錯すればまう兩角立せず君は上に臣は下にありて犯忤せざるなり洵も石頭大師の明暗函蓋の妙旨も理事箭鋒の秘訣も洞山大師の兼帶回互もこの錯然たるまうあらざれば其妙旨を得ず錯然たるときも吉乃句と配當せざるハ正偏互墮せざるの故に離卦あり左れハ何をにても犯忤すきは文彩に顯れ染汚に屬するなり豈に夢みある明暗回互正偏兼帶の奥旨を得るものあらんや
天真而妙不屬迷悟因縁時節寂然昭著 ○恒川和

上は辨に上の間枝葉を脱却し當躰即是乃旨を辨するあり**天真**乃妙道ハ迷悟に屬せし利鈍ハ差位は因により縁より時を得て節に應するなり寂然とは不動の義なり昭著とは顯現れ義なり全く思量に涉らす如乎と一是あり此れ唯天道の常理あり輪語に曰く天何を言ふや四時行きて百物生るは是をかり
○月舟和上の辨に單に君の心と心と毫髮も私心交へされは天真自然ハ妙徹なるなり君も万機と大臣も任せ玉むて端挾無爲なり全を迷悟れ音沙汰な**因縁**を功極つてより無功に到るまう勤めて只管に時節**因縁**を觀るるなを佛性ハ大義も透間なり十方虚空消殞の時節と閑看をへあらず一彈指前あり閃電光を云を尙や是れ

鈍かり未だ船舷を跨らざるは好興三十棒かり寂然とは
不動をぞ知るべし直下昭著なることを

○編者曰く天眞ハ永嘉大師の本源自性天眞佛をば誠の
不可思議の物躰なり故に妙なり妙かれハこそ凡聖迷悟
の數量に落せと左れと柳は緑花は紅と万法如然に現成
するハ時節れ因縁に依らざるはかき其昭著を始終寂然
にして初中後毫髪を機輪を動せず之れ天眞の直様なる
もの

細入無間大絶方所毫髪之差不應律呂○恒川和

上れ辨に上乃章と所謂る天眞妙道其細とるや塵刹に
閉塞して間隙なき其大なるや法界に周遍し際限なし觸
々現成して頭々圓滿なる間と髪を入を以然きとも毫釐

差あきハ天地懸に隔る譬は律呂れ制は毫髪を錯まきは
十二律俱に差て音律に應せしこの處難々唯實參實悟
要する而已

○月舟和上れ辨に上れ二句は寂然昭著れ時節なり下れ二
句は我が宗は功勳を貴ふといへとも功極るとるを芥子
程乃功勳殘きは無功の旨と契をかたし譬は樂器の絲毫
の違むより律呂と叶はざるか如き無功とハ目と眉の如
き曹山和上に僧あり目と眉を相知るやや問ひされは曹
山和尚を相知らずや云へり此問答の始終を考へて知る
へし華嚴經に船陸の況むあり是より上は寶鏡三昧に本
意を示し下は中下の機を隨て法の次第を明せり
○編者曰く昔は黃帝伶倫を命と律呂を造る六律は陽音と

六呂の陰音かり合され十二律ありこまを十二ヶ月の節氣に配ひ左れば律呂ハ万物を生出する此根本なり毫も差あるは四時調和せず三昧を恰る然り一念差へを八万四千あり四聖六凡あり叶へて直下三昧の露現なり天眞の妙道なりこま能く本意の在る所を參るべし

今有頓漸縁立宗趣宗趣分矣。卽是規矩。○恒川和上の辨に今字は用得て妙なり天眞の妙道は無間に入り方所は絶ひれば迷悟に属せし修證は涉らば寂然やとて昭著なり何を頓漸に宗趣に屬せんや然れども今時れ衆徒は遲疾の氣分あるによりて自屈しく各自意根下し就て頓漸の宗趣を安排するなり外相に宗趣を自然に頓漸と以て定式規矩とあす終に其規矩裡に陷て絶大に妙道

を知らず嗚呼何の所以をや

○月舟和上の辨に心佛衆生この三は差別なきと雖も根機は不同なるが故に頓漸に宗趣を分ち規矩を立するを○編者曰く如是法に頓漸の閑名目なしや雖も證悟は己見より宗趣分れ規矩は立するを代なれハ之れを天眞乃律呂に應せざるものかり宜しく石頭大師此人根に利鈍あり道に南北の祖の金句に參るべし

宗通趣極眞常流注

○恒川和上乃辨は縦令は頓漸規矩を脱却し來り宗通趣極をも尙ほこれ理路に屈見なり之を眞常流注と云ぬかり争ふ不染汚は宗旨に合ふよとを得んや

○月舟和上の辨に漸修の拙みき設む宗として貴ふ所は通

し趣と向ふ處を極めて至理に契ぬも真悟よあはす根本
を切らざるる故に眞常流注と云ふあり

外寂内搖繫駒伏鼠

○恒川和上の辨にお乃段を渠る
馳走希求の念慮を以て比況す通極の知見は未だ脱せし
眞常還て流注をみすれみ必ず閑に枝葉を弄ひるおとな
かれ

○月舟和上乃辨に二乘聲聞を有餘涅槃證をせしめて
若會上には尙是れ破器みよて智水貯めるに足らずと
揀はきより如何やなきは外寂内搖ハ繫駒伏鼠なればを
り

○編者曰く宗趣は通極すきはとて己見猶存すれば一層れ
病かり故に一步に進めて慈門と打開し法の檀度となり

初て己到住着の病を治する人と申すへし

先聖悲之爲法檀度隨其顛倒以緇爲素顛到想滅

冥心自許

○恒川和上此辨に先聖より想滅まゝ乃五句ハ

冥心の一句を弄するおため設くる所は序語かり若し
如上五句の下に就て直に己見滯着と説くと此は祖意を
失るるあり静み語脈を診みて之を知らしむ佛祖は一切
衆生は悲愍して苦を樂とし不生の生とし不滅を滅と
輪回の顛倒休期あることかく法乃檀度となり假に權化
門に入る其顛倒に隨て驚と鳥とみし鳥を驚となす方便
功成し機宜漸く調む顛倒想滅なきは冥心自許まゝ尙ほ
己見に滯る之を己到住着の病とみす此病至はて重し是

故に觀樹古徹ハ擧ク冥心自許の滯事を説を請ふ次章を
看よ

○月舟和上ハ辨ニ從上の諸祖之を哀愍シ大法の施主とな
りて甘露の白法と布施す彼れる顛倒ニ隨テ和泥合水漸
く機ハ調熟ニて縑色を轉ス本の素縑トなせり參見知識
の功ト以テ他に因り証悟セ自ら肯フなり

要合古轍請觀前古佛道垂成十劫觀樹 ○恒川和

上の辨ハあレ段ハ冥心自許の句より來れり冥心ハ自諾
の病至ツて重し古佛尙有リ法華經ニ曰く大通智勝佛十
劫ノ間道場ニ坐シて佛法現前セハ十劫を過テ佛法現前
ハ甚麼トしてス斯の如くなるハ未シ冥心ノ大果を忘セ
ざる所以アリ十劫ハ十成の所に至テ滯着スるハ謂ナり

冥心ハ卻テ法の樂病トある所以ハ曹山大師の曰く本
來衣ト掛けテして法身を認得セ法執忘セ己見猶存ス
法身邊ニ墮在ス必シ窠白ハ翻轉シて始めて妙用全ク彰
るハあレ冥得ハ一トと云へり言は冥心自許ハ自受用三昧
に誇る則ハ菩提乃証ハべき多く衆生の度すハきなし是
れ法身住着の病ナリこの病津ハ沈ム未タ蔭涼の樹とな
ること能ハハ之ト佛法現成セ云へり觀法漸ク成り
て法執の汗衫ハ脱却シ鹽胎ニ入り馬腹ニ入りク大自
在ト得ル此時佛法始ク現前シ一切衆生のハめニ蔭涼ハ
樹トある是れ諸佛の大悲願力ナリ
○月舟和尚乃辨ニ古來の途轍ハ由らんにハ前古の勝躡ハ
觀察ハ一ト祖門下ニ乃ハ多クならシ諸佛ハ法ハ是ノ如シ觀樹

の功成をきは佛法現前せむ云ふおとなし

○編者曰く大通は法華經化城喻品にあり○今乃本文は古佛を證えて極功の轉念難きを示す洵は後學を策進するの大慈かり端坐六年面壁九歳も徒看に付ゆるかかき若し十成も滞りかは恰も貴き金屑を眼に入きは翳とあるをらし○指月老人は滯果の病後智勝佛を徵し功の轉念難きを明し治療を釋尊に証えく容易に過患を除去するは出藍の卓見なりと古芳敬奉して止まら幸に後進の賢哲眸を轉して看過あるか

如虎之缺如馬之鼻

○月舟和上の辨に虎人を喰へは其耳缺るあり自ら知らさきと人と喰むし功は以く法爾と云て其耳缺るあり馬足に鼻と名る白毛あり自ら知ら

さきやあの鼻を以て暗にを惑はる路と知るなを是を天然の道理に云て作意ゆるにあらす此喩を以て寂然昭著の旨を明せり誠に廣大なる佛法現前すること纒かゝ喩を假て意を盡し文章の妙なき

○編者曰く本文より以下は恒川和上單に面山和上の吹唱を譲り弁會を爲さざりしる吹唱は現に上梓を世に行はるれを拔萃して茲に誌すも勞して功なく左かゝる死したる牛頭に草按するを同一なれば今は止免る古芳聊さる之を補欠の任に充んとる思ふかり請ふ照了○虎は格物論に狀ち猶れ如く大さ牛に似たり人を食ぬ毎も耳必し一缺を今試に人食するの數を驗するに差ふおとなし○鼻は本草綱目に夜眠あり註に足膝の上にはり馬

おまを以て能く夜行く故に夜眼と名く左ら虎の缺は
犯忤なり馬の鼻は自肩なり何れも病に志て功位に轉し
難きと況ふるなり之を上の十劫觀樹を以て後學を策
進せられたるものや參究す洵に石頭大師の所謂の執事や
契理を誠えられたるに相應するものと覺悟せり月丹和
上の解を寂然昭著の旨に喩へあまや兎角に短文なきを
全意を參るるよ由る幸に後昆其意を得るに愈ること
なる也

以有下劣寶几珍御。以有驚異。驚奴白牯。○月舟和

上の辨は佛法現前すきは必ず衆生のたえに開演す衆生
本より長者れ一子あまを五十年の伶併辛苦して下劣の
根生ある故に長者乃門に至りても寶几珍御の王子なり

とて親多近く大志なし左れば長者より追捉まきは悶絶
して地に躡る此機を調へんやて弊垢衣と着き除糞の器
以持して同事行なむ若しくは驢胎に入り馬腹に入り
て驚奴やなり白牯となりて漸々に近づいた終には如來の
寶位を嗣るじむ是の如く中下根の調へあたら化す
は佛祖に悲願なり菩薩の根性なり佛行を學ぶ者はこれ
根性と具へされも二乗に死地に陥り佛海中の死屍に一
如す決まら一切智々の彼岸に到ることを能くさるなり
○編者曰く寶几をしまはき等の寶蓋瓔珞の珍器と云ひ
珍御は綾羅錦繡の御衣云ぬるり之れハ物の爲に則と
かり下劣の衆生を憐み假りに寶几珍御を弄して來機に
赴くの化用を示すなり左れと未だ尊貴をたて容易に近

よらす却て驚異して逃げ隠る、故に亦下りて狸奴白牯
乃卑賤となり尿尿の掃除より漸々に親近となり終に長者
の嫡子あることと知らしめ國土國寶を讓與して無二獨
尊の境界に至るといふ洵に滯累の病を轉したる同事行の
方便あり之れを智慧の二門嚴然として佛法現成の所詮
と申さへよ○驚奴を色黒き奴郎にして下賤の至極した
るものなり白牯は男の白牛なり共に異類中行あり宜
く瀧山和尚の水牯牛洞山大師の奴兒卑子の公案を照參
すべし

弄以巧力射中百步箭鋒相值巧力何預○月舟和

上の辨は弄は巧力達人あり巧力を以て射く百歩に中つ
ていへども箭鋒相拄ふる妙處に至ては全く巧力乃及ふ

所より何らも百發百中して自ら中る所以を知らざる妙所
を喻めるなぞ

○編者曰く器は昔時射官の名なり今ハ射的の妙を究めた
る養由基の如き人を指すこれ人おれば柳葉を去る百歩
よりして射きは百發百中一も差ふことなし然るハ天真の
妙用を於るるを修證の能く預る所にあらざるはこそ初
め鹿野苑より終り拔提河に至るまで三百四十余會毫を
當機に差ふことなり故に利根れ者は佛果を証し鈍根は
は當來に佛果を感得せざるなり洞山大師これ妙用を
明かに射術を以てせり然るを佛にあらざる人と
して此妙用を具せざるハ佛海中の死屍なりと參する
木人方歌石女起舞非情識到寧容思慮○月舟和

上乃辨み無功に至ては巧力に預るゝす論談笑語都て木
人_レ歌あり行住坐臥石女_ノ舞なり

○編者曰く宗語に木人_ト石女_ト鐵牛_ト木馬_ト金
計_ト玉線_ト云へるは都て不思議乃物體を顯揚する
の辭あり今此如きも如來を婆々和々に忘て言相おき無
舌人の斛語なれば恰も木人の歌の如く今時に墮せざる
なり若くハ起住去來多な不能みして嬰兒おれば没蹤跡
斷消息なり寧ぞ情量意識の到るものならんや洵に物機
に應動する此妙用を學人おそる思慮_ヲ容るへきにあら
す

臣奉_ル於君。子順_ル於父。不順_ル不孝。不奉_ル不輔。○月舟和

上の辨に木人石女_レ歌舞_レ以て諸方に_レ了當と稱す洞

上には入門_ヲ許せ_テ今は其歌舞をも抑して臣は君に奉
從し子ハ父に孝順_スと順_スせされ_テ孝に_レあ_ラ奉_スせされ_テ
輔にあ_ラすと綿蜜の家風を唱_テ奉_スせられたるなり

○編者曰く孝悌忠信を彝倫の定理なきは取も直さず臣。子
の君父を奉順_スるを吾人本具の妙用なり其間一合乃相
汝_ト見_ル水乳相合する深蜜に至ては毫髪も思慮の音沙
汰は_カい君は正位なり臣は偏位_{ナリ}父ハ青山なり子ハ
白雲なり父子一枚おれ_ハこ_ト白雲常に青山_ニ倚れ_トも
總に知らず君臣道合すれ_ハこ_ト回互兼帯乃機軸なり寧
んを情識乃到る_トれ_ハな_ラんや實に吾人王三昧乃妙行_ヲ
説_キきたる_トれ_ハあ_ラん

潜行蜜用。如愚如魯。只能相續。名主中主。○月舟和

上の辨に潜行蜜用ハ愚乃如く魯の如く更に傍人乃見破
に落ちず即ち但も能く相續く行くとときえ君臣道合して
内外なく主中の主となり兼帯の君主と稱るるなり寶鏡
三昧ハ一大事因縁ヲ開示して學人ハ悟入せしむる乃法
門なきハ則ち如來の本懷ある法華と同一に志て佛法中
の大眼目ヲ參すへし

○編者曰く吾人の日用を愚魯の如く淳厚誠篤の妙行にて
ありぬればこそ事に觸れず志て知り縁に對せしめて照す
之を如是れ法ヲ保護する乃真様なり蜜附の端的あり呼
く大尊貴生と云む主中れ主と云ふなを誰も恚摩人ヲ試
みよ面門を摸索して見よ悉く眼横鼻直乃那人よ志て佛
祖の嫡子ならざるはみし嗚呼大なる哉洞山大師乃直指

や言んぬは是を却て親するらす敬讚禮拜恩海此一滴よ
酬んと欲す南謨佛

寶鏡三昧薰蕕談終

寶鏡三昧薰蕕談附錄

林古芳錄

其三

寶鏡三昧

如是之法。佛祖蜜附

○第一大意。本書ハ洞山大師過水悟道ハ偈ハ所謂ハ渠今正
におき我。我今こそ渠にあらずとの蜜意より根境圓融ハ
法門ハ説き回互兼帶の機軸ハ明して正く吾人ハ滯果住
功ハ病を治し玉ふなり實ハ其妙唱を能く如是法を宣
揚して三昧ハ的意ハ打開したるものなりと參得し
くするなり(全篇の大意)

○第二解義。如は一切不變の義あり。是は物々非を脱するに
謂なきや。法もと無法、心もと無相なり。争も各貌ひるま
とを得んや。故に如是法や云ふ。其如是法を祖佛單傳し來
る今も洞山大師より曹山和尚に附するの意なり。廣くは
一切衆生汝やして如是法を得るもの。一箇もなす蜜
とて。教家に談する秘密の謂は。何らひ却て汝の邊にあ
るに。蜜にして祖佛從來不藏の蜜あり。

○第三宗乘。實相無相微妙此法門は一切如々にして全く染
汚あるまどか。是を諸佛此眞乘を群生の本源なり。佛
々祖々是の如く傳へ是の如く附して。間斷あることあ
即今誰れる契通する底る。面門を摸索して如何と見ふ擬
議せハ六十棒。

其 四

寶鏡三昧

銀盃盛雪。明月藏鷺。

○第一大意。乃一章を如是の妙法。保護するの提綱に
して。回互不回互此機軸あり。全く染汚なき此妙用を。此旨よ
り打得するあり。(一章の大意)

○第二解義。銀盃にまき雪。まき明月にまき鷺にまき。皆同
一の白色に。類すれとを。全を齊する。即二あり。又
即一なり。實に離せ。即せ。祖佛單傳此如是法。保護
するの眞様なり。

○第三宗乘。能く一切此法に。一色し。一切の事に。一如し。銀盃
と雪と異色を。如し。明月と鷺と同相にして。纒も隔く

なく混ぶる毫を間なれ之と大功一色の修行と云む一切の法に齊しからず能く一切の法に混ぶて而も墮せざる處深知て同ふせざるを異類の修行と名ふなり衲僧門下え斯の如く自由れ妙行ありて初て天よ先て心乃祖やふる大丈夫と謂つべきなり

右ハ總志て本章乃下に辨したる文意を摘取分録したるものかり何人たるを意を用ゆるあや精ならハ斯乃如く大意解義宗乘れ三科に排記することを得る也

参考

可睡穆山老師一日子に示して曰く中古師三同契文又は寶鏡三昧歌と唱ふ而して參同契に文を加ふるあや未だ証據

を見たと雖とも寶鏡三昧に歌字あるよ和志て加之乎寶鏡三昧に古來歌と脱するれ論は面山和尚れ吹唱に詳あり考ぬるに石頭洞山れ兩祖こ乃擧あるを學人然して恒に讀誦せしめ自ら回互兼帶根境圓融れ法門深暗裏み薰覺せしむるれ婆心に成りたるものにして決して室内れ蜜書にはあらず故よ今に至るまで朝課よほき念經にまれ之を誦する所以にして恰も永嘉大師の證道歌三祖大師の信心銘に於あるる如きものなりと今や記を闔くに垂んとして拍々其間に哩囉と唱へ慕古ノ参考よ供スル爾云

跋

參同契寶鏡三昧者佛門之寶藏室中之秘訣也曩時舟川二老施之鍵鑰然而不解受用者殆半矣芳公更與之鑰即不開者自開不解者自解焉初學階之之則猶以芥子破鐵塔然則藏中之珍玩非他物室中之秘訣豈異尋常之談乎

懋大機撰

古人ノ塵糞堆ヲナシ册トナツテ世ニ行ル則チ參同契寶
鏡三昧是ナリ今ヤ芳頭陀垂涎ノ余リ更ニ塵糞ヲ増層シ
テ億萬人ヲ理却セント欲ス這裡誰レカ回避ノ人ソ諸佛
ノ出世祖師ノ西來三十塵糞上ノ往來ヲラサルハナシ咄
塵糞カ黄金乎黄金カ塵糞乎忘想スルコトナカレ忘想セ
ハ一棒ニ打殺シテ狗子ニ與ヘテ喫セシメン而已

明治十九年一月

林道隆記

明治十九年一月三十日出版御届
明治十九年二月 日出版

定價金四拾二錢

静岡縣平民

刪補校訂并出版人

林

古

芳



遠江山名郡大之郷村
四拾九番地

發賣所

攝

善

會



遠江山名郡袋井
觀福寺中

